

2024 年 3 月

食料安全保障月報

(第 33 号)



令和 6 年 3 月 29 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021 年 6 月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月 1 回、月末を目処に公表します。

2024 年 3 月食料安全保障月報（第 33 号）

目 次

概要編

I	2024 年 3 月の主な動き	1
II	2024 年 3 月の穀物等の国際価格の動向	5
III	2023/24 年度の穀物需給（予測）のポイント	5
IV	2023/24 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	5
V	今月の注目情報「米国の 2024 年の生産・輸出動向」	6

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	1 0
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	1 1
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	1 2
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	1 4
5	食品小売価格の動向	1 8
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	1 9
7	FAO 食料価格指数	2 1

今月のコラム

	「ブラジル便り①：大豆・とうもろこしの生産現場から」	2 2
--	----------------------------	-----

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞	2024/25 年度の冬小麦は主産地で生育状況が改善
	＜カナダ＞	2024/25 年度の生産量は 34.6 百万トン(前年度比 8.3%増) (AAFC)
	＜豪州＞	2023/24 年度の実産量及び輸出量は 0.5 百万トン上方修正
	＜EU27＞	2023/24 年度の輸入量は史上第 1 位の 13.0 百万トン
	＜中国＞	2023/24 年度の輸入量は輸入ペースの低下を受け下方修正
	＜ロシア＞	2023/24 年度の輸出量は史上最高の 51.0 百万トン
	＜ウクライナ＞	2023/24 年度の輸出量は前月予測から 1.0 百万トン上方修正
2	とうもろこし	9
	＜米国＞	収穫面積の増加等により、生産量は史上最高の見通し
	＜ブラジル＞	2023/24 年度の実産量は高温乾燥により減少
	＜アルゼンチン＞	2023/24 年度の実産量は、前年度から回復する見通し
	＜中国＞	単収及び収穫面積の増加を受け、生産量は史上最高
	＜ウクライナ＞	2023/24 年度の実産量は、侵攻前の 2021/22 年度より 29.9%減
3	コメ	1 5
	＜米国＞	2 月の降雪で 2024 年の中・短粒種向け灌漑用水源が補給

- <インド> ラビ米の生育は良好、田植えは2月末までに概ね終了
- <中国> 温暖な気候により広東省等で早稲の播種が進む
- <タイ> 乾季米は灌漑用水不足や高温等から減産見込み
- <ベトナム> 南部メコンデルタ地域の冬春作（乾季米）の単収は海水侵入で減少

II 油糧種子

- 大豆・・ 2 1
- <米国> 収穫面積の減少により、生産量は前年度より 2.5%減
- <ブラジル> 2023/24 年度の実産量(CONAB)は前年度より 5.0%減
- <アルゼンチン> 2023/24 年度の実産量は、前年度より倍増
- <中国> 2023/24 年度の実産量・消費量・輸入量は史上最高
- <カナダ> 2024/25 年度の実産量は 6.9 百万トンの見込み(AAFC)

- (参考1) 本レポートに使用されている各国の穀物年度について(2023/24 年度)・・・ 2 7
- (参考2) 単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 7
- (参考3) 各国のクロップカレンダー一覧（主要品目毎）・・・・・・ 2 8

【利用上の注意】

表紙写真：アルゼンチンの収穫を待つとうもろこし（サンタフェ州 2024 年 2 月 27 日）
天候に恵まれ作柄は良好。

(概要編)

I 2024 年 3 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2023/24 年度の作況について、北半球では収穫が終了した一方、南半球では、豪州で小麦の収穫が終了、南米で大豆等が生育期から収穫期を迎えている。

品目別にみると、3 月の米国農務省（USDA）の需給報告によれば、小麦については、前年度高温乾燥の影響を受けたインドや米国等で増産となるものの、前年度史上最高の豊作だった豪州等で減産となり、世界の生産量は前年度を下回る見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、2022 年 3 月に過去最高を更新した小麦の国際相場は侵攻時の水準を下回ったものの、ウクライナの穀物輸出に関する 4 者合意については 2023 年 7 月にロシアが離脱し停止。その後の黒海の臨時回廊からの輸出や EU 経由での代替輸出の進捗も含め注視が必要。

とうもろこしについては、ブラジル等で減産見通しであるものの、米国や中国で史上最高の生産量となり、世界の生産量は前年度を上回る見通し。大豆については、ブラジルや米国で減産見通しとなるものの、今後収穫期を迎えるアルゼンチンで増産見通しとなり、世界全体の生産量は前年度を上回る見通し。いずれの品目も、旺盛な消費により期末在庫は依然としてタイトな状況の中で、引き続き注視する必要。

FAO(国連食糧農業機関)が公表している食料価格指数については、1 月の 118.2 から、2 月(最新値)は 117.3 と下落(参考:2023 年 2 月 129.7、2022 年 2 月 141.2、2021 年 2 月 116.4、2020 年 2 月 99.4)。

海上運賃については、バルチック海運指数(穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数)が、直近 5 カ年の平均値より約 3 割高い水準で推移。

早期注意段階の継続について

緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、主要輸入農産物の国際価格や海上運賃の上昇、国際的な物流の遅れ等の当時の状況を踏まえて、2021 年 7 月に適用。

2024 年 3 月も引き続き適用した一方で、主要穀物等の国際相場や海上運賃についてはここ最近下落傾向で推移しており、引き続きその動向に留意。

【参考】早期注意段階について（農林水産省 HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

米国農務省（USDA）の3月見通しによれば、2023/24年度の小麦は収穫が終了し、生産量は、前月から変更なく2,340万トン（対前年度比9%増）。とうもろこしは収穫がほぼ終了し、生産量は前月から下方修正され2,950万トン（同9%増）。輸出量は黒海沿岸を通る臨時回廊からの輸出が増加し、小麦、とうもろこしとも前月から上方修正されそれぞれ1,600万トン（同7%減）、2,450万トン（同10%減）（参考1）。

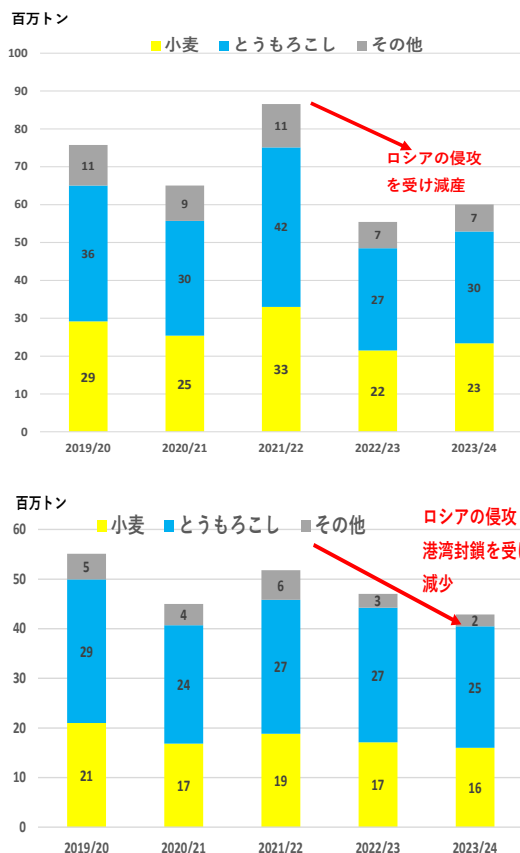
ウクライナ農業政策食料省によれば、2024年産の春作物の作付けが開始され、3月7日時点で春小麦は4.3千ヘクタール作付けされた（前年同期6.7千ヘクタール）。とうもろこしは4月以降作付けが開始されるとみられる。

臨時回廊からの輸出増

2022年7月22日の国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの4者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（黒海穀物イニシアティブ）により、穀物等3,283万トンが輸出されたが、2023年7月17日にロシアの離脱で履行が停止。

一方、代替輸出ルートとして、ルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通る臨時回廊からの輸出や、運河等を利用しルーマニアのコンスタンツァ港などを経由した輸出が行われている。代替輸出ルートのうち、EU域内を経由した輸出量は減少傾向にある一方、臨時回廊からの輸出量は前年10月以降伸びているが、ロシアの侵攻や中東情勢の影響等引き続き注視が必要（参考2）。

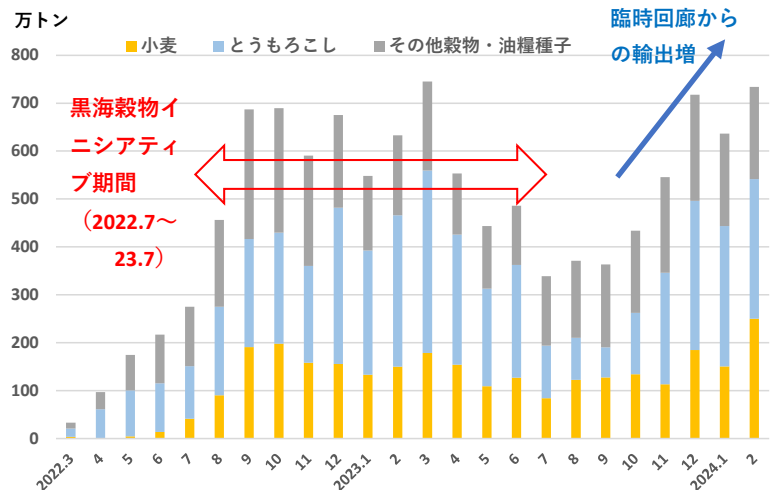
（参考1）小麦ととうもろこしの生産量(上)、輸出量(下)の推移（年度）



出典：米国農務省「PS&D」（2024. 3）

注：その他は他の穀物（大麦等）

（参考2）ウクライナの輸出量の推移（月毎）（2022. 3～24. 2）



出典：現地調査会社調べ

注：その他はひまわり油・大麦など。

1 ウクライナ：臨時回廊からの輸出が増加

前年7月の「黒海穀物イニシアティブ」の停止後、ウクライナは、ルーマニアとの国境に面したドナウ川沿いの港からの出荷や、EU 経由の陸路等による代替輸出ルート of 拡充を試みてきた。ロシアの攻撃がドナウ川沿いの穀物輸出施設まで及んでいるほか、鉄道の軌道幅がウクライナと EU で異なる等のインフラの制約も課題となっている。このため、ウクライナはルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通る新ルートを IMO(国際海事機関)に通報し、前年8月以降「臨時回廊」の運用が開始された。

ウクライナの穀物・油糧種子の輸出に関し、「臨時回廊」を中心とした港湾からの輸出货量（一部ドナウ水路を利用したルーマニア経由の輸出含む）は7～9月に毎月230万トン前後で推移していたが、その後増加し12月は614万トン、本年1月は549万トンに減少も2月は638万トンまで回復し、同2月はウクライナの穀物輸出全体の9割弱まで比率が上昇した。

EU 向け輸出については、EU による東欧5か国向けのウクライナ産穀物輸入禁止措置が前年9月15日以降解除されたが、トランジットを除き、ポーランド、ハンガリー及びスロバキアは独自の輸入規制を継続している。一方、ルーマニアは前年10月13日、在庫の積増しなどに限定しウクライナ産穀物の輸入を許可した。ウクライナ産穀物等の流入に関し、ポーランド、スロバキア及びハンガリーでは農業団体やトラック運転手の反発が強く、前年11月6日以降、国境検問所の封鎖等の抗議活動が断続的に行われている。本年1月には農家の抗議活動がフランスやベルギーまで広がった。今のところ影響は陸路に限定され、臨時回廊中心のウクライナの輸出への影響は軽微。

東欧5か国の農相は1月15日、欧州委員会にウクライナ産穀物への輸入関税の賦課を求めたが、欧州委員会は3月20日、ウクライナ産農産物の一部品目のセーフガード等の緊急措置を含む免税措置の1年間延長で暫定合意したと公表した。ポーランドでは、特に農業者の反発は強く、ロシア産農産物の輸入にも反対しており、迂回輸入も含め他国との国境の多くで抗議活動が行われている。

※黒海穀物イニシアティブ停止後、代替輸出ルートとして、以下に掲げるものが実施又は検討。

- 1 臨時回廊 ウクライナのオデーサ港など黒海港湾から、ルーマニア・ブルガリア沖経由で輸出
- 2 トラックや鉄道輸送、ドナウ川の運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港経由で輸出
→ルーマニアのブカレストからウクライナ国境まで高速道路建設中。

コンスタンツァ港で従来施設を改修しウクライナ産農産物専用ふ頭の運用が3月以降予定。

- 3 ポーランドを経由し、バルト海沿いのグダニスク港、ラトビアのリガ港等経由で輸出
→グダニスク港をウクライナ産穀物の輸出向け港湾として整備することに合意。
- 4 クロアチアを経由し、アドリア海から輸出



（出典：France Agrimer 他より）

2 南米：2023/24 年度はブラジルは減産もアルゼンチンは増産見通し

ブラジル食料供給公社（CONAB）の3月見通し（2024. 3. 12）によれば、ブラジル中西部や南東部等での悪天候で特に大豆が影響を受け、2023/24 年度の穀物・油糧種子の生産量は対前年比 7. 6%減の 2 億 9, 559 万トンとなっている。このうち、収穫期を迎えた大豆の生産量は 1 億 4, 686 万トン（対前年度 5. 0%減）の見通し。また、とうもろこしは生産量全体の 8 割を占める冬作の作付けが開始されており、生産量は 1 億 1, 275 万トン（対前年度 14. 5%減）の見通し。

一方、アルゼンチンでは、3 月に入り降雨があり、生育期の大豆は土壌水分が補給され生育条件が改善されたが、収穫が開始されたとうもろこしは降雨を受けて収穫が遅れ気味となっている。ブエノスアイレス穀物取引所の週報（2024. 3. 14）によれば、大豆の生産量は 5, 250 万トン（前年度比 150%増、対過去 5 年平均 24%増）、とうもろこしの生産量は 5, 650 万トン（前年度比 66%増、対過去 5 年平均 17%増）といずれも増加している。輸出税に関しては、ミレイ新政権誕生後、引上げの検討もされたが、農業団体等の強い抵抗を受けて断念し、当面の間、以前から変更はないものとみられる。

3 カナダ：2024/25 年度の小麦の作付面積は前年並み

カナダ統計局が 3 月 11 日に公表した 2024 年産に関し昨年末に約 9, 600 農家に対して実施した作付意向調査結果によれば、主にカナダ西部で栽培される小麦については、前年並みの 1, 095 万ヘクタールとなり、うち、デュラム小麦は、対前年比 5 %増の 257 万ヘクタールとなった。北アフリカや欧州からのデュラム小麦の輸入需要の増加が要因とみられる。また、菜種については同 3 %減の 866 万ヘクタールとなった。市場価格の低下に加え、生産資材コスト高などで小麦と比べて収益性が低いことが要因とみられる。

一方、カナダ東部で栽培される大豆は同 1 %減の 226 万ヘクタールとなった。搾油需要や輸出需要は堅調も市場価格の下落により作付け意欲が減少したことが要因とみられる。一方、とうもろこしは同 2 %増の 157 万ヘクタールとなった。作付けは冬小麦を除いて雪解けを待って 5 月以降開始されるとみられる。

II 2024 年 3 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、2月末、210ドル/トン台前半で推移。3月に入り、安価なロシア等の黒海産小麦の潤沢な供給や中国の輸入契約の取消しを受け、190ドル/トン台前半に値を下げた。その後、価格の下がり過ぎ感からの買戻しで190ドル/トン台後半に値を上げたものの、輸出が低調なことから、3月中旬現在、190ドル/トン台半ばで推移。

とうもろこしは、2月末、160ドル/トン台前半で推移。3月に入り、売られ過ぎからの買戻しから160ドル/トン台後半まで上昇。その後、ブラジル食料供給公社（CONAB）の生産見通しの下方修正を受け上昇したものの材料に乏しく、3月中旬現在、160ドル/トン台後半で推移。

コメは、2月末、630ドル/トン台後半で推移。3月に入り、乾季米の市場への流入が続いているものの、インドネシア政府の入札が4日に成立したこと（タイ及び一部パキスタンから約30万トン）や、3月末にインドネシア政府が再び入札を行う可能性があるとの市場の予測等から値を上げ、3月中旬現在、640ドル/トン台半ばで推移。

大豆は、2月末、410ドル/トン台半ばで推移。3月に入り、米国の好調な週間輸出成約高や米国農務省の穀物需給報告での期末在庫量が市場予想を下回ったことや、ブラジル食料供給公社（CONAB）の生産見通しの下方修正を受けて上昇し、3月中旬現在、430ドル/トン台前半で推移。

（注）小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、コメはタイ国家貿易委員会価格

III 2023/24 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前年度より 2.2%増の 28.09 億トン。消費量は、前年度より 1.8%増の 28.14 億トンとなり、3年連続で生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫量は前年度より減少し、期末在庫率は前年度を下回り 27.5%となる見込み（資料2参照）。

生産量は、前年度より、小麦で減少も、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.09 億トンの見込み。

消費量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.14 億トンの見込み。

貿易量は、前年度より、小麦、コメで減少も、とうもろこしで増加し、穀物全体で増加し、5.08 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.75 億トンと前年度より減少、期末在庫率は、前年度より減少する見込み。

（注：数値は3月の USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による）

IV 2023/24 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.59 億トン。消費量は前年度を上回り 6.44 億トンとなり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率は前年度を上回る 20.4%となる見込み。

（注：数値は3月の USDA「Oilseeds : World Markets and Trade」による）

V 今月の注目情報：米国の2024年の生産・輸出動向

米国の2023/24年産の生産量は、大豆は減少となった一方、とうもろこしは史上最高、小麦も1割増となった。とうもろこしの輸出量はブラジルを抜いて世界第1位に返り咲いたものの、小麦及び大豆の輸出は伸び悩んでいる。2月の農業アウトルックフォーラムの見通しでは、2024/25年度は需給が緩和し、期末在庫率は3品目とも前年度を上回る見通し。最近の米国の生産・輸出動向をまとめた。

注：文中の「2023/24年度」等は穀物年度で、米国の小麦は2023年6月から2024年5月。国や作物によって異なる(品目別需給編P.27参照)。

1 2023/24年産：とうもろこし生産量は史上最高

(1) 小麦

米国農務省(USDA)によれば、2023/24年度の小麦の生産量は、過去2年間と比較して干ばつ被害が限定的であったため、対前年度比9.8%増の4,931万トンとなったものの、過去10年平均(5,227万トン)を5.7%下回っている。なお、2021/22年度の生産量は春小麦、2022/23年度の生産量は冬小麦がそれぞれ干ばつの影響を受け2002/03年(4,371万トン)以来の低水準であった。

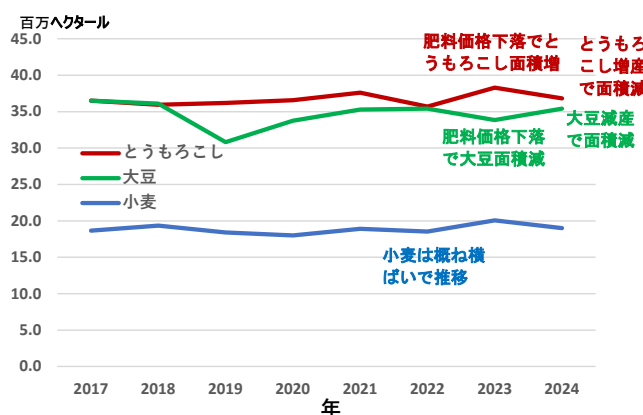
(2) とうもろこし

2023/24年度のとうもろこしの生産量は、史上最高の3億8,969万トン(対前年度比12.4%増)となった。天候に恵まれ史上最高の単収(11.13トン/ヘクタール)となったことに加え、肥料価格の下落等を受け、大豆等他作物と比較し肥料投入量の多いとうもろこしへ作付けがシフトしたことにより収穫面積が9.9%増加したことも背景にあるとみられる。

(3) 大豆

2023/24年度の大豆の生産量は、前年度比2.5%減の1億1,334万トンとなった。天候に恵まれ単収が向上したものの、肥料価格の下落に伴い、単収の高いとうもろこし等へ作付けがシフトし、収穫面積が4.4%減少したことが要因とみられる。

図1 米国の小麦、とうもろこし、大豆の作付面積の推移



出典：米国農務省「農業アウトルックフォーラム」による。

2 2024/25年産：小麦、とうもろこし及び大豆いずれも需給緩和の見通し

(1) 小麦

2月15日にUSDAが農業アウトルックフォーラムで公表した2024年の小麦の作付面積は前年度比5.2%減の1,902万ヘクタールとなる見込みであるものの、前年度より単収が上昇することを受け、生産量は、5,171万トン(前年度比4.9%増)と増産になる見通し。増産に伴い輸出量は増加するものの、消費量は減少する見通し。この結果、期末在庫量は前年度より増加し、期末在庫率は前年度から5.1ポ

表1 米国の2024/25年度需給見通し(小麦)

(単位：百万トン)

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25	
			予測値	対前年度 増減率(%)
生 産 量	44.91	49.32	51.71	4.9
消 費 量	30.43	31.14	30.86	▲ 0.9
うち飼料用	2.10	3.27	2.99	▲ 8.3
輸 出 量	20.66	19.73	21.09	6.9
輸 入 量	3.32	3.95	3.27	▲ 17.2
期末在庫量	15.51	17.91	20.93	16.9
期末在庫率	30.4%	35.2%	40.3%	5.1
(参考)				
収穫面積(百万ha)	14.37	15.10	15.54	2.9
単収(t/ha)	3.13	3.27	3.33	1.9

資料：USDA「Agricultural Outlook Forum」(2024.2.15)

イント上昇し、4年ぶりに40.3%と40b%台に回復する見通し。

(2) とうもろこし

作付面積は3,683万ヘクタール（同3.8%減）と減少するものの、単収が11.36トン/ヘクタールと過去最高の前年度からさらに増加することから、生産量は3億8,203万トン（同2.0%減）と、前年度より減少も、史上3位に相当する高水準となる見通し。消費量は、飼料用及びバイオエタノール用ともに増加する見通し。輸出量も増加するものの、生産量が引き続き高水準なことから期末在庫量は大きく増加し、期末在庫率は前年度より2.3ポイント上昇し、17.2%となる見通し。

(3) 大豆

作付面積は3,541万ヘクタール（同4.7%増）の見通し。生産量は、単収が増加することから過去最高の2021/22年度（1億2,150万トン）を上回る1億2,261万トン（同8.2%増）となる見通し。

バイオ燃料向け需要が堅調なことから消費量が増加し、輸出量も供給増により増加する見通し。ただし、生産量が消費量及び輸出量の合計を上回ることから、期末在庫量は大きく増加し期末在庫率も前年度より2.3ポイント増の9.9%と回復する見通し。

表2 米国の2024/25年度需給見通し（とうもろこし）

（単位：百万トン）

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25	
			予測値	対前年度 増減率(%)
生 産 量	346.75	389.70	382.03	▲ 2.0
消 費 量	305.96	316.37	318.91	0.8
うち飼料用	139.38	144.15	146.06	1.3
エタノール用等	131.48	136.53	137.17	0.5
輸 出 量	42.19	53.34	54.61	2.4
輸 入 量	0.99	0.64	0.64	-
期末在庫量	34.55	55.17	64.32	16.6
期末在庫率	9.9%	14.9%	17.2%	2.3

（参考）

収穫面積(百万ha)	31.85	35.01	33.63	▲ 3.9
単収(t/ha)	10.89	11.13	11.36	2.0

資料：USDA「Agricultural Outlook Forum」(2024.2.15)

表3 米国の2024/25年度需給見通し（大豆）

（単位：百万トン）

年 度	2022/23	2023/24 (見込み)	2024/25	
			予測値	対前年度 増減率(%)
生 産 量	116.21	113.35	122.61	8.2
消 費 量	62.95	65.97	68.72	4.2
うち搾油用	60.20	62.60	65.32	4.3
輸 出 量	54.21	46.81	51.03	9.0
輸 入 量	0.68	0.82	0.41	▲ 50.0
期末在庫量	7.19	8.57	11.84	38.1
期末在庫率	6.1%	7.6%	9.9%	2.3

（参考）

収穫面積(百万ha)	34.88	33.35	35.05	5.1
単収(t/ha)	3.33	3.40	3.50	2.9

資料：USDA「Agricultural Outlook Forum」(2024.2.15)

3 伸び悩む米国の輸出と堅調な国内バイオ燃料需要

(1) 伸び悩む穀物輸出

米国の最近15年間の穀物貿易の動向を振り返ると、2011/12年度までは、小麦、とうもろこし、大豆いずれも米国が世界最大の輸出国であった。しかし、とうもろこしや大豆のシカゴ相場の価格が史上最高値を記録した2012/13年度の大干ばつを境に、2022/23年度までに小麦、とうもろこし及び大豆いずれの輸出量ともトップを譲ることとなった。代わって台頭してきたのが、小麦におけるロシア、とうもろこし・大豆におけるブラジルである。農業アウトックフォーラムでは米国の穀物・大豆輸出はいずれも前年度より増加すると見通されている。他方で、15年前と比較すると、世界の小麦、とうもろこし及び大豆の輸出量はそれぞれ1.6倍、2.1倍、1.9倍と伸びているものの、米国の当該品目の輸出量はそれぞれ0.8倍、1.1倍、1.1倍と伸び悩んでいる。

一方、例えば、とうもろこしで見ると、2022年以降ロシアの侵攻を受けているウクライナや2022/23年度に60年ぶりの干ばつを経験したアルゼンチンも15年前と比較すると、輸出量がそれぞれ4.8倍、2.5倍増加している。

(2) 堅調な国内バイオ燃料需要

一方、米国では国内での穀物需要の伸びが目立っており、特に堅調なのがバイオ燃料需要で

ある。とうもろこしのバイオ燃料需要は、新型コロナの感染拡大期に、経済活動の縮小や自動車での外出が減少したこと等から一時減少したが、その後、新型コロナの影響の緩和に伴い経済活動が回復したことから増加に転じた。

また、近年、ジェット燃料（SAF）向けに大豆油が使用されており、2023年12月に政府がSAFの税額控除の対象をとうもろこし由来のバイオ燃料にも拡大したことなどを背景に、2024/25年度の大豆の搾油需要は対前年度比4.3%増、とうもろこしもバイオ燃料需要は0.5%増の見通し。バイオ燃料では地産地消の動きも進んでおり、例えば、コーンベルト西部のネブラスカ州では、隣接するコロラド州のデンバー空港向けにとうもろこし由来のバイオ燃料供給を計画している。

なお、欧州などで普及が進んでいる電気自動車（EV）については、米国では中西部などで長距離を移動する際の充電スタンドの整備が遅れていることや、バッテリーに係る寒冷地での冬季の対応が難しいことなどから都市部を除いて普及が進みにくいといった見方もあり、当面の間、自動車や航空機向けなど交通機関向けのバイオ燃料需要は堅調とみられる。

4 米国の輸出競争力は低下傾向

（1）小麦

世界の小麦需要増に伴い、特に中近東や北アフリカで輸出シェアが伸び、輸出量は15年前と比較すると2.7倍の5,100万トンとなったロシアを始め、EU、カナダ、豪州にも抜かれ、米国の輸出量は現在世界第5位となっている。

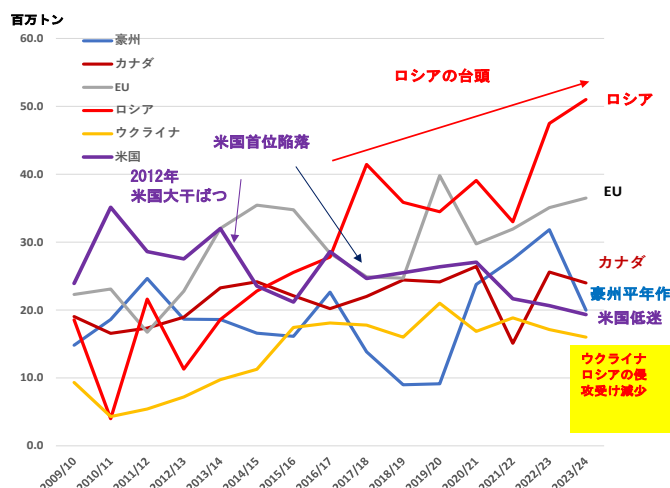
2023年12月に中国が米国産小麦の大量買い付けを行ったが、3月にその一部がキャンセルされた。この結果、米国の小麦輸出量については3月見通しで41万トン下方修正され1,932万トンとなり1971/72年以来の低水準となった。

（2）とうもろこし

2021/22年度まで米国が圧倒的な生産量で、輸出シェアも優位に立っていたが、2022/23年度、ブラジルのとうもろこしの増産と中国のブラジル産輸入開始に伴い、輸出量第1位の座をブラジルに明け渡した。

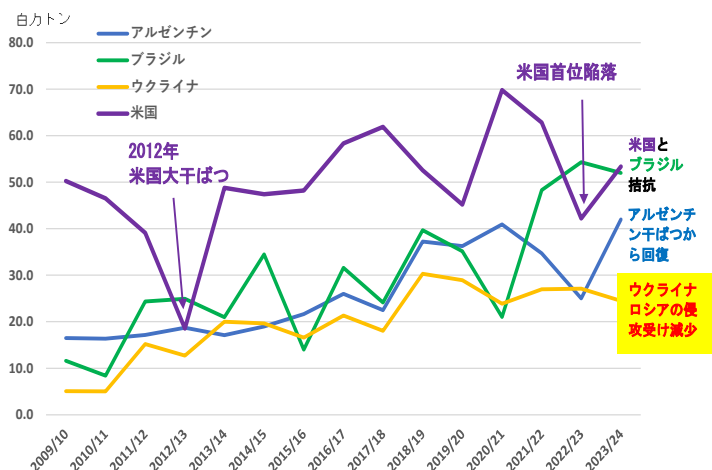
2023/24年度は米国が史上最高の豊作となった一方、ブラジルの減産見通しから輸出量が減少し、わずかながら米国の輸出量が上回り、米国の輸出量は5,334万トンとなり世界第1位の輸出国に回り咲く見通しである。今後は米国とブラジルの両国でシェアが拮抗していくとみられる。

図2 主要小麦輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」（2024.3）による。

図3 主要とうもろこしの輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」（2024.3）による。

(3) 大豆

2023/24 年度のブラジル産の収穫が開始され、主産地のマツグロソ州の乾燥の影響により前年度より減産となるものの、最近における鉄道といった輸出インフラの整備等が進んでいることで輸出競争力が引き続き強いことから、ブラジルの輸出量見通しが3月見通しで上方修正され、1億300万トンとなった。15年前は米国産の輸出シェアが高かったものの、その後、米国産の輸出量はほとんど変動していない。世界の大豆輸入シェアの6割近くを占める中国は、リスク回避のため輸入多角化の一環として輸出港等インフラへの投資などを背景にブラジル産輸入を増加させたことから、ブラジルの輸出量が大幅に増加し、2012/13年度以降、米国はブラジルに次ぐ世界第2位の輸出国となっている。

(4) 国際穀物価格への影響

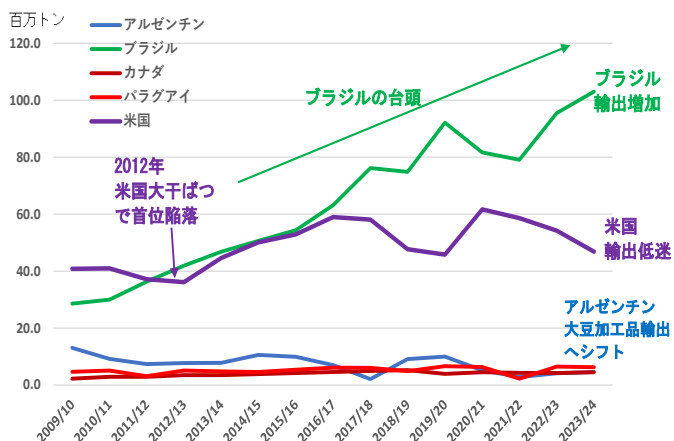
こうした米国産の近年における輸出競争力の低下に加え、ブラジルの大豆収穫やアルゼンチンの豊作見通しを受け、本年に入りシカゴの穀物相場は下落傾向で推移し、2月に入り、大豆が12ドル/ブッシェルを割り、とうもろこしも2月下旬に一時4ドル/ブッシェルを割り込み、いずれも新型コロナの感染拡大期の2020年11月以来の水準まで下落した。小麦についても、中国による米国産輸入のキャンセルを受け、3月上旬には2020年8月以来の5ドル20セント/ブッシェル台まで下落した。

米国農家のとうもろこしと大豆の作付選択に際し、作付時期の大豆相場の価格をとうもろこし相場の価格で割った「比価」が参考指標の一つとなっており、①比価が2に近ければ単収の高いとうもろこしを植えた方が有利、②比価が3に近ければ高値で取引される大豆を植えた方が有利といわれている。

2022年2月のロシアによるウクライナ侵攻以降、とうもろこしがウクライナの輸出品目であること等も背景に、期近もので算出した比価はとうもろこしが優

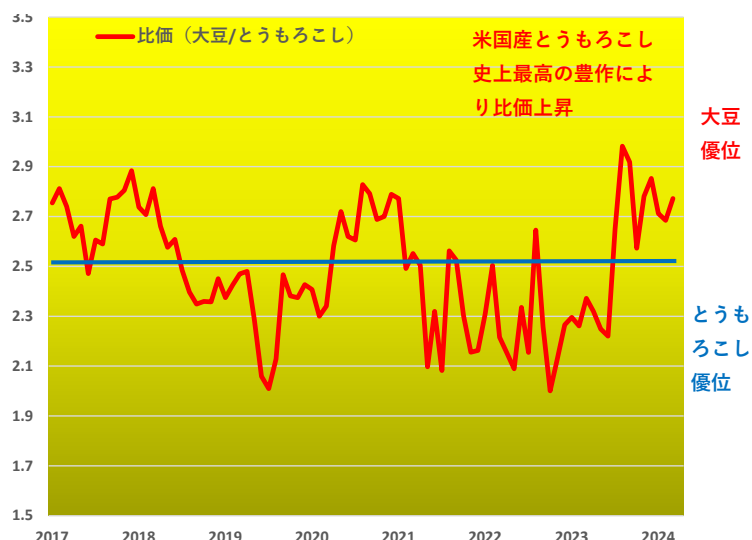
位の2.2~2.3の範囲で推移し、2023年は米国のとうもろこしの作付面積が増加し、大豆の作付面積は減少した。こうした中で、2023年の秋以降、米国産とうもろこしが史上最高の豊作となった一方、大豆が減産となったことを受け、比価は2.7~2.8まで上昇した。現在のところ大豆が優位のため、大豆の作付けが増えるとの見方もある。3月28日、USDAから米国農家の作付意向調査結果が報告される。米国の作付け動向が国際穀物需給や相場に与える影響は引き続き大きいこともあり状況を注視していく必要がある。

図4 主要大豆輸出国の輸出量の推移



出典：米国農務省「PS&D」(2024.3)による。

図5 最近8年間のシカゴ相場の比価（大豆/とうもろこし）の推移



注：とうもろこし、大豆の価格には、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）を用いた。